

意見広告

新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、子どもにもマスクを付けさせ、ワクチンを打たせる。この対策は今後も必要なのだろうか？当初は「未知のウイルス」と恐れられた新型コロナも、この2年間に世界中で研究が進み「既知のウイルス」になりつつあり、様々なデータも出揃ってきた。その研究結果や厚生労働省のホームページに掲載されている最新データを元にした分析と見解を、専門家（井上正康 大阪市立大学名誉教授）に訊いた。

厚労省ホームページ
などから考えよう

子どものマスクとワクチン、今後も必要？

感染予防はいつまで？

子どものマスクやワクチンを始め、これまでも行ってきた様々な感染予防は、今後も必要なのだろうか？当初から一貫した見解を示し続けてきた井上正康教授は、次のように語る。「欧米諸国では被害が大きかった新型コロナも、図①のように日本では小さな被害で済んでいます。被害の度合いに大きな差が生じたのは、日本人が病原性の低い初期の新型コロナ株に早期に感染していた事、免

疫の特性が民族によって異なることに起因しています。この基本的な免疫学的事実を、今後の感染予防に活かすべきです。」

さらに国内では健康な子どもや若者の新型コロナ感染死はほとんどなく、重症化もしていない。一方、新型コロナで亡くなった人の平均年齢は82.2歳（東京郵政発表）で、これは男性の平均寿命を上回る。図②、また一見すると、

70代以上の死亡者が多そうに見えるが、日本では毎年40万人前後（1日平均3800人）が亡くなっている、新型コロナの感染死2.8万人（累計）は、その2%に過ぎない。図③

仮に、今後出現する変異株の毒性が強く、体の丈夫な若年層でも重症化する場合は、高齢者も含めて多くの被害が出る可能性がある。その場合には、社会・経済活動を自粛して「国民全体で警戒する必要」があるのかもしれない。しかし、「その可能性は限りなく低い」と井上正康教授は分析する。

「ウイルスは変異を繰り返すたびに感染力が強くなるが、私たちの免疫力も強化されるため毒性は相対的に弱まっていき、重症化しにくくなりま

す。そのため既往歴や基礎疾患のある高齢者を中心に警戒すれば十分であり、これまでのように社会全体で過剰に警戒する必要はありません。」

「感染力が強いウイルスが必ずしも恐ろしいウイルスではないのだ。子どものマスクやワクチンの必要性の有無も含め、今後、新型コロナにどれだけの注意を払うべきなのか、考え直す時期に差し掛かっているのかもしれない。」

消毒で子どもの体が弱くなる？

感染予防の中でも、手洗いうがい、消毒はすればするほど、手や喉に付着しているウイルスや細菌を減らすことができる。しかし人の免疫はウイルスや細菌などと触れ合うことで鍛えられることができる。図①、図②で示した通りだ。しかし現在、新型コロナは指定感染症2類（結核・SARS-CoV-2等）以上に扱われている。そのためPCR検査でひたひた「陽性」と判定されると、子どもの学校が「休校」になったり、同僚が「濃厚接触者」として扱われたりして、周囲に迷惑を掛けてしまう。日本では新型コロナそのものよりも、自分自身が「世間の迷惑者」になってしまふことを恐れている人が多い。

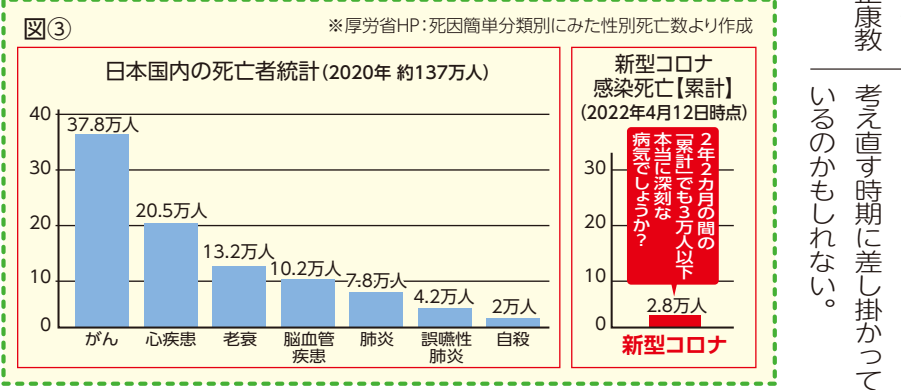
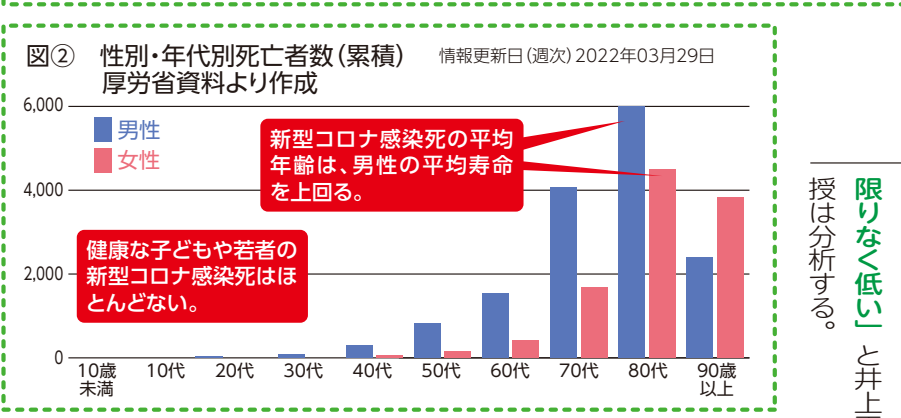
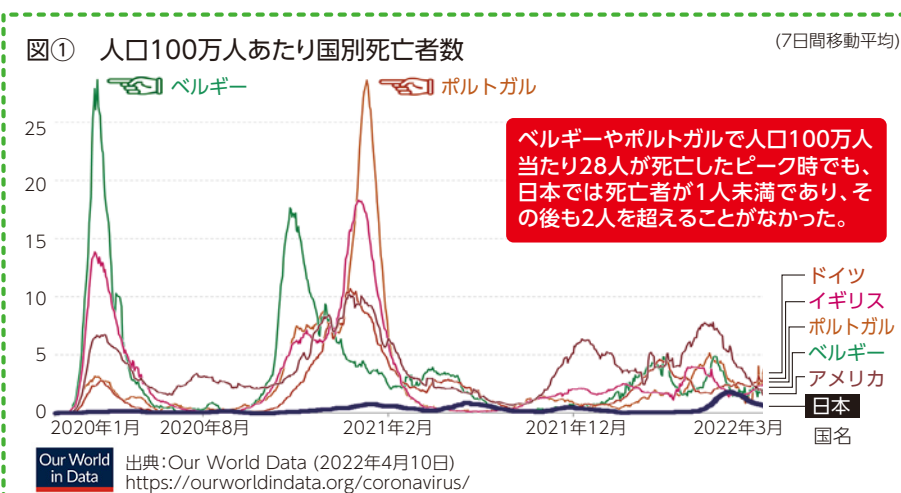
「病気になること」は悪いこと？

これに関して、井上正康教授は「子どもはじやれあつて遊び、ワイワイ喋りながら給食を食べ、様々な細菌やウイルスと触れ合いながら免疫力を鍛えていきます。この時期は過度な感染によって強い身体を作る大切な時期です。ところが今、子どもたちは消毒

や飲食などの過剰な予防対策によって免疫力を鍛える機会を失っています。これでは子どもたちの免疫力が十分に鍛えられず、普通の風邪を引いただけでも重症化する可能性が高くなってしまう。」「と警鐘を鳴らしている。

後にもこのような対策は必要なのだろうか。

世界各国はコロナ前の日常を少しずつ取り戻しつつある。しかし、私たちがコロナ前の「日常」を取り戻し、未来ある子どもたちを健やかに育てるためには、まず私たち大人が「常識」を取り戻す必要があるのかもしれない。



マスクをしていても感染してしまう理由

コロナ禍以降、私たちはマスクやアクリル板などによりウイルスを徹底的に避けるようになったが、井上正康教授は次のように指摘する。「そもそもウイルスは、空気、水、食物、家の中や生活空間

の至る所に存在しています。その大半は人体に無害であり、私たちの体内にも無数のウイルスが共生しています。また、ウイルスは極微細サイズ（1ミリの1万分の1〜10万分の1）のため、マスクと顔との

隙間などを簡単にすり抜けてしまいます。病院や介護施設ではマスクの着用率がほぼ100%ですが、クラスターが頻繁に発生しています。どんなにマスクや消毒等で感染予防しても感染する時はしてしまいます。人はウイルスと共に生きていくしかないのです。」

そもそもがウイルスに感染する宿命を受け入れてその社会（ウィルスの生態）であるにもかかわらず、無菌状態や「ゼロコロナ」を目指し続け、人との触れ合いや人間らしい生活を犠牲にしているのが、日本の現状と言えるかもしれない。

ゼロコロナ(無菌)

- 隔離 ■自粛 ■まん防
- 三密回避 ■人流制限
- マスク ■ステイホーム
- ソーシャルディスタンス
- ロックダウン など

この方法でバリアを張れば大丈夫のはず…

ウイルス近づいてくるな!

WITHウイルス(共存)

免疫力があるから大丈夫!

ウイルス近づいてくるな!

教えて! 井上先生

マスクで気を付けることは何かありますか？

子どもが日頃から他人の表情を見て育つことは、脳と心の発達に欠かせません。また、マスクで口元を隠し合うと、「笑顔」でのコミュニケーションができません。人格を形作る大切な時期にマスクによって表情を隠し合っている、喜怒哀楽の感情を学び、感受性を豊かにする訓練が十分にできず、相手の感情を理解する力が十分に育まれない可能性があります。

また「熱中症」にも注意が必要です。学校現場では「体育でもマスク着用」が原則になっていますが、文科省は「**体育の授業におけるマスクの着用は必要ありません。特に呼吸が激しくなる運動を行う際はマスクを外してください。**」との指針を示しています。同様に環境省と厚労省も、屋外でのマスクの着用について、人と十分な距離が取れる場合には「熱中症を防ぐためにマスクをはずしましょう」と呼びかけています。

プロフィール

井上 正康
大阪市立大学名誉教授
(分子病理学・医学博士)

感染症学、病理学、分子病理学など幅広い医学知識から、俯瞰的に「新型コロナとワクチン」を分析。当初から一貫した見解を示し続け、「本当は怖くない新型コロナウイルス」など著作も多数。「ためてガッテン」「世界で一番受けたい授業」「あるある大辞典」「ちんぷいぷい」などテレビ出演も多い。4月5日に、衆参の国会議員を対象に「新型コロナとワクチン」に関する勉強会を国会内で開催している。



マスクについては、すでに東京都多摩市立の全小中学校で、「マスク着用をしない子ども」への配慮がなされるようになり、全国初のマスク自由化が実現しています。

すでに全国紙も含め、累計49紙 発行部数1,747万部に意見広告を掲載

株式会社ゆうネットは、社会貢献活動の一環として、子どものマスクとワクチンに反対する意見広告を掲載する取り組みを行っています。(※特定の政治団体や宗教団体とは関係ありません)

皆様からのご支援で活動しております。

累計寄付金額 258,789,708円 (2021年11月30日～2022年5月2日10時40分時点)

必見! 医学者・医師・専門家・議員・有識者含む

4,000名超の賛同コメントは 下記よりご覧ください。

そしてあなた様にもお願いがございます。

この内容にご賛同頂ける方は、下記二次元コードより「一言コメント」のご協力よろしくお願ひします!

<https://jccovid.net/>

ゆうネット 意見広告 検索